

『ある魔法使いの話』

地の文：男性、物語の語り手。

A：男性、ただのアニメショップ店員だが、どこか奇妙な言い回しをする。

B：男性、いわゆる魔法使い、もしかしたら本当に魔法使いかもしれない。

その男は、町外れの小さなアニメショップでフィギュアを買い漁っていた。  
ずんぐりとした腹、脂ぎった指先、疲れきったような細い瞳。  
その容貌から、僕はその男の年齢を30代半ばと予想した。  
計ったかのようなタイミングで、レジの店員が男に声をかける。

A01「お兄さんはおいくつですか？」

B01「何歳になったか忘れたよ。でも18歳は超えてるね」

A02「お兄さんはどこから来たんですか？」

B02「へその奥からさ」

A03「お兄さんはどこへ行くんですか？」

B03「あっちへ行くよ」

A04「連れて行くのはこの子たちだけにしてくださいね」

店員が手渡したアニメ柄の紙袋を両手に、男は店を出た。  
僕が男に追いつくと、彼は道路の真ん中にいて、3,4人の幼女に見守られながら六芒星を描いていた。

B04「これから二次元への扉が開くから見ていなさい、見ていなさい」

男はそう言うと、六芒星の周りをぐるぐると回りだした。

B05「見ていなさい、見ていなさい、いいね」

怖がっているようにも見えた。楽しんでいるようにも見えた。  
やがて男がぴたりと立ち止まった。男は六芒星の真ん中に先ほどの紙袋を2つ置いて、言った。

B06「彼女たちが連れて行ってくれる。今見せてあげる。今見せてあげる」

男は『もってけ！セーラー服』を歌いながら、またぐるぐると回りだした。  
僕は二次元への扉が見たいから、幼女たちと一緒にいつまでも男を見守っていた。

突然トラックが現れて男を跳ね飛ばした。

男はフィギュアたちとともに、満ち足りた顔で遠くへ消えていった。  
二次元への扉が開かれることはなかった。